

動をさらに広げ、地域の人々と呼応する流れをつくり出している。この流れは法制化後の青写真を描く作業へと連動し、さらにうねりをつくろうとしている。仕事おこしの本格実践が求められる段階。連合会組織のあり方や、各県ごとに準備を進めているワーカーズコープ連合づくりも、具体化を急がれる。

政局の秋の中、いよいよ議員連盟の動きも、選挙後を睨みながら動き始めた。法案骨子が作成され、法案の内容づくりも本格段階である。まだまだ骨子案は、我々の求める内容との距離はある。しかし、正式に骨子案が衆議院法制局によってまとめられた意義は大きい。法制化の最終局面を実感させる緊張感が高まってきた。全国・全市民的に、法案についての意見交換の機会を設けていくことになる。求める運動から煮詰める運動へと、最後の踏ん張りどころだ。

アメリカ・サブプライム発の「嵐」が本格化してきた。これを契機に、世界経済とその中で日本のさまざまなマネーがどう動いているのかがあぶりだされ始めている。そんな中で、嵐に耐え、嵐を越える地域経済と豊かな公共、そして市民が主体者とし

て育つときが来た。指定管理者制度の第2クールに対しても、公共の仕事が新たな仕事を地域でつくり出していく提案を前面に押し出し、挑戦の幅も広げている。何よりも、法制化運動と公共の担い手としての挑戦が結び、意欲と可能性を高めている。いまこそ協同組合の出番である。11月22～23日に開かれる全国協同集會も、「協同組合の時代」と「協同労働の時代」を示す絶好の機会である。集會の準備過程で、これまでにない「協同組合とは」についての意見交換も、時代の反映である。さまざまな困難の中で、協同組合の最も本質的な価値は、「人の成長・発達」によって図られるべきである。協同組合運動を通じて、組合員は豊かに、賢く、人間性を育てているか。この課題は、公共とは何かに通じ、連帯を生み出す行動に直結する。多面的な「生」の育ちが問われる時代。その中心に「協同」と「労働」を据えることが、嵐を超える市民自治と言えるのではないか。そんなメッセージが人々の心を捉え、行動を生み出すためにも、もう一踏ん張りの努力を惜しまず、仕事おこしの王道へと入っていきたい。

研究所だより

榎本 木綿 / 関 智子

厳しかった残暑もいつしか夜長の虫時雨へと変わり、すっかり秋の気配となりました。協同総研でも今夏の新体制スタートからようやく落ち着きを取り戻しつつ、秋のフォーラムや各種集會の準備に目まぐるし

い日々を送っています。

『いま「協同」を拓く2008全国集會in新潟』もいよいよ開催間近に迫ってきました。今回の集會では、協同組合関係者ばかりでなく、数多くの地域NPO関係者や市民、学

生などが実行委員会の準備段階から一緒に関わっています。協同総研でも会員の園田恭一さん、栃倉幸一さん、荒井一弘さんなどが実行委員会へご参加くださり、集会の成功に向けて準備を進めています。

先日も、第5セッション「豊かな公共を支え広げる市民自治」パネリスト出演依頼のため、広島で行われたブロック会議終了後、辻駒健二さんにお会いしてきました。辻駒さんは広島の安芸高田市川根振興協議会会長を務めておられる方です。川根地区は島根県境に位置し、昭和、平成と相次ぐ合併により人口が3分の1（現在600余名）にまで激減した高齢化率50%超の集落です。過疎化が進む中、壊滅的なほどの自然災害に見舞われ、それを機に地域住民全戸参加の「川根振興協議会」が組織強化されました。以来30年余「行政に頼るばかりでなく地域のことは自分たちでやろう」、「もやいしよう（支え合おう）」の精神で、市町村合併を住民自治組織を創る絶好の機会と捉え、さまざまな活動を行ってきたそうです。病院や商店街、学校が次々と閉鎖され、村で唯一となった農協売店の閉鎖が決まった際には、交通手段のないお年寄りが買い物に困るからと全戸が一口1,000円の出資をし、空いた建物を利用して地域による直営売店を立ち上げました。このほかにも川根振興協議会が中心となり、農業振興や特産品の開発、障がい者やお年寄りのための福祉サービス、若者定住対策やさらに雇用を創出する地域開発といった活動にまで至り、事業内容によっては部分的に行政にも

「参画させてあげる」そうです。そして、どの事業もが地域の困りごとをきっかけに、一つひとつを皆で話し合い、地域にある資源（人や施設など）を活用して事業を起こし、継続させています。いま協同労働を通じて私たちが挑み、めざす地域づくりとの共通点も多く、協同集会へのご参加もご快諾いただけました。

「じいちゃん、ばあちゃん、地域のみなどいろいろなことを楽しみながら働く。働く場や地域で夢を語り、家でもまたみんなで楽しく暮らすという生活環境を創っていかにかあいいけんのですよ」。「人はね、歳月を重ねたから老いるのではないですよ。夢や希望を失ったときから老いるんよ」とおっしゃった辻駒さんの言葉が印象的でした。

地域のあり方は数え切れないほどです。第5セッションでは辻駒さんの報告を含め、新しい公共と市民自治の可能性について議論を深めたく思います。ぜひご参加ください（榎本）。

全国集会まであと1カ月となりました。9月24日の実行委員会の前に、第3セッションパネリストの渡辺みのりさんを訪ね、五泉市へ行ってきました。五泉市は新潟市のお隣、新潟駅から電車で約30分のところにあります。五泉市の名の通り、水がきれいな地域だそうです。お会いした渡辺さんは、野菜の直売所の運営を仲間の農家の女性たちと一緒にしています。直売所の立ち上げに関わった仲間たちは、県の普及センターで開催された講座に集まった仲間、ここだけの集まりではなく、他にも

何か一緒に行おうということで「いずみの会」を立ち上げました。そのころの農家の主な収入源は、お米の出荷によるもので、年に1回の収入で1年間をやりくりすることが多く何か家計の足しにできる仕事はないか、と探していたようです。家事や育児など家の仕事にも、また田んぼ仕事にも支障のない、自分たちの空いた時間を有効に使えた仕事はないか、と考えた結果が野菜を作って売る、ということでした。

しかし、農家ですので野菜をつくることはできてもそれを売るノウハウはありません。そこでまた普及センターで研修を受けます(普及センターは農業指導も行うのですが、そのほかにもさまざまな講師が登録されており、渡辺さんらはそこで接客の仕方や、売れる野菜のディスプレイ方法などを学びます)。直売所は渡辺さんのお宅の育苗の建物を借り、机などは各家庭から要らなくなったものを持ち寄って、オープンさせます。

また、渡辺さんたちの活躍は直売所に限らず、地元の農協やスーパー(数店舗)にも野菜を卸しています。

スーパーでの野菜は地場産の野菜売り場コーナーに置かれています。渡辺さん曰く「最初は奥の方だったのに、徐々に入って

すぐのコーナーに置かれるようになった」とのこと。地場産野菜の人気の高さが伺えました。

渡辺さんはその他にも近隣小学生の総合学習での農業体験の受け入れやリースづくりの講師、食育ボランティアなど、さまざまな活動をされています。

渡辺さんのさまざまな活動を聞き、仲間を集めて「いずみの会」を立ち上げるころは、ワーカーズコープの行うヘルパー講座の受講生が地域福祉事業所を立ち上げる部分と似ているところがあると思いました。働きたいと思う人びとが個々人の力を十分に発揮し、仲間同士力をあわせて働く、というところはまさに協同労働そのものだと感じました。

とても元気な渡辺さんに私も元気を頂き、そして里芋も頂いた1日となりました(関)。

.....

たくさんの方々の方力でつくり上げる協同集会の準備期間も残り少なくなってきました。会員の皆様にもぜひご参加いただければと思います。また、引き続き協同集会へのご賛同やご協力いただける方、団体を募集しております。ご存じの方は、ぜひ協同総研までご紹介ください。

新入会員(2008.9.1 ~ 9.30)

長崎清一さん(新潟県総合生活協同組合)
濱口逸記さん(センター事業団常勤顧問)
関心：社会保障

増田奈津子さん(日本労働者協同組合連合会本部)
関心：貧困・格差問題・協同組合原論